

人間の思考・行動の類似性に関する仮説

—類身体性理論—

渡邊 榮文

内容目次

1. はじめに
2. 人間の思考・行動の類似性に関する古今東西の格言
3. 人間の思考・行動の類似性の根拠
4. 人間の思考・行動の類似性に関する仮説の提示—類身体性理論—
5. おわりに

1. はじめに

2013年3月末日に定年で熊本県立大学の学窓を離れたが、研究は晴耕雨読ながら続けている。研究テーマは「人間の思考・行動の類似性」に関するものである。なぜ人間の思考・行動は類似するのか。このテーマについてはこれまで少し愚考し物した。

1つは「アドミニストレーション過程同型論—なぜアドミニストレーション過程は同じであるのか—¹⁾」においてである。本稿の概要は以下のとおりである。

人は生活するためにさまざまな行動をとる。これをアドミニストレーション (administration) というと、これには public administration、business administration、school administration などがある。これら個別具体のアドミニストレーションはそれぞれ異なった目的を持っているが、それらを実現するための過程は等しく同じである。今日の流行言葉でいえば、Plan→Do→Check→Action の循環過程である。すなわち、アドミニストレーション過程はPDCAである。なぜアドミニストレーション過程は同じか。

この課題に取り組むためにアメリカの社会学者である P.J.ディマジオ (Paul J.DiMaggio) と W.W.パウエル (Walter W.Powell) の理論を参考にした。彼らの理論は組織の同型化のメカニズムを説明するためのものである。同型化メカニズムは三つである。1つ目は強制的同型 (coercive isomorphism) である。これは組織に加えられる政治的な圧力等によって起きるものである。2つ目は模倣的同型 (mimetic isomorphism) である。これは不確実性に直面する組織が成功している他の組織を真似ることによって起きるものである。3つ目は規範的同型 (normative isomorphism) である。これは専門家集団が持っている規範によって起きるものである。拙稿では行政分野、経

営分野、非営利分野のそれぞれの行動過程を検討した。これら三分野の行動過程はPDCAであり、三分野とも同型であった。

いま1つは「人間の思考・行動の類似性に関する仮説²⁾」においてである。本稿の概要は以下のとおりである。

わが国の社会現象を説明するための理論は他国の理論を参考にして、わが国で構築される必要があると思う。仮説を提示するゆえんである。それは「人間の類身体性は人間の思考・行動を同型にする」である。人間の類身体性とは「類としての人間の身体構造の共通性のこと³⁾」をいう。類としての人間の身体構造は共通しているので、自然科学の領域が共通了解の領域として記述可能となる。「人間の身体性の構造が共通性をもたなければ、各身体にとって自然はさまざまな存在様相をもって現われることになる⁴⁾」からである。人間の類身体性こそが人間の思考・行動を同じにするのではなかろうか。自然現象の説明に適用される人間の類身体性理論は、社会現象の説明にも適用可能ではないだろうか。

これら2つの拙稿を発表した後は人間の思考・行動の類似性に関する論稿は物していない。しかし、この問題は晴耕雨読の中にあっても私の脳裏を離れることはなかった。本稿はとくに後者の論稿の再考と敷衍である。このため本稿では、まず人間の思考・行動の類似性に関する格言と思われる古今東西のものを取り上げ、次いでその根拠を探り、最後にそれを仮説として提示したいと思う。

森美智代教授が令和2(2020)年3月末日に熊本県立大学を定年退職する。筆者は教授の専攻分野(会計学)と異なるが、共に総合管理学部創設時から学の道を歩んできた。本稿は仮説の提示という序論的考察のものではあるが、これを森教授の退職記念に捧げる。教授のますますのご健勝とご活躍とを祈念する。

2. 人間の思考・行動の類似性に関する古今東西の格言

人間の思考・行動の類似性に関する格言は古今東西を問わずみられる。それらをアト・ランダムに取り上げ、本稿の端緒としたい。

(1) 「歴史は繰り返す」

これは岩波書店『広辞苑』(第七版)の「れきし【歴史】」の項目の慣用句である。意味は「(ツキジデス『歴史』に由来するとされる英語の成句から)歴史上一度起こった出来事は、場面や主人公を変えつつもそのあと何度も起きる」ことである。

古代ギリシアのトゥキュディデス(Thucydides、紀元前460年頃~400年頃)は、ペロポネソス戦争(BC431~BC404)について書き残している。それは『歴史』である⁵⁾。彼は本書の意義を述べる。「過去の出来事や、これに似たことは人間の通有性にしがたって再び将来にも起るものだという事を明確に知ろうとする人には、この本を有益と十分に認めることができるであろう⁶⁾」。

「歴史は繰り返す」の出自は本書と目されている。そのくだりは「内乱[ペロポネソス戦争]が諸都市に起した惨状は残酷でしかも数多かつたが、人間の本性が同じであるかぎり、強いか弱いか個々が置かれた条件の変化によってその様相こそ変りはするが、過去に起きたことはまた将来にいつも起るものである。・・・現在内乱が起きている都市も、将来起きる都市も、前例からならって、攻撃に極端な独創性と異常な報復手段を案出して、常に新しい計画の最先端を開く⁷⁾」

というものである。

歴史が繰り返すのは人間の通有性や本性による。人間の通有性や本性とはどんなものであろうか。トゥキユディデスは内乱が起きている都市の人間像を描いている。主なものをあげると、それらは暴勇が雄雄しい同胞愛と呼ばれること、極端な熱狂が男らしさの1つに数えられること、極言をする者が常に信頼されること、陰謀を企てる者が賢く思われること、悪事を企てない者に悪事を働かせる者が喜ばれること、人は無能の善人と呼ばれることを恥とすること、人は利巧者と呼ばれて有頂天になること、常時目先の利益をそれぞれの判断の基準とすること、隣人の所有物を狙うことなどである⁸⁾。なぜ人間はこれらの性質を持っているのであろうか。

(2) 「己れの欲せざる所、人に施すこと勿れ」

これは『論語』の一則である。その意は「自分がしたくないこと、されたくないことは、人にもさせることなく、また、しかけるべきでもない⁹⁾」ことである。

自分がしたくないことやされたくないことは、他人にもさせてはならないという。しかし、この格言には他人がしたくないことやされたくないことを尋ねるとか相手の顔色を窺うということは含意せしめられてはいない。なぜ自分はこのことが他人もしたくないということがわかるのであろうか。

(3) 「阿吽の呼吸」

これは岩波書店『広辞苑』（第七版）の「あうん【阿吽・阿伝】」の追込項目である。意味として「共に一つの事をする時などの相互の微妙な調子や気持。特に、それが一致することという」とある。

阿吽はサンスクリット文字（梵字）の最初と最後の字である。興膳宏によれば¹⁰⁾、「阿」、「吽」はともに字音を写したものであるから、漢字自体に意味はないという。しかし阿吽は密教では深い思想的意味を持ち、それには「万物の発生する根元と、その帰着する究極」という意味が込められているという。阿吽の思想的含意はともかく、日常的には阿吽は「吸う息と吐く息がぴたりと一つに合うこと」、したがって広辞苑にあるような意味で用いられる場合が多い。本稿は阿吽をこの意味で用いる。阿吽の呼吸は政治絡みで用いられる。その具体例を3つあげてみる。

具体例その1。これは自民党政権時代の福田康夫首相と小沢一郎民主党代表との間の連立政権の話である。この話は、どちらが先に持ちかけたというより阿吽の呼吸だったというものである¹¹⁾。元首相も元代表も連立政権の問題を相手方に持ちかけたことはなかった。なぜこの問題について両者の気持ちが一致したのであろうか。

具体例その2。「昨年〔2012年〕9月9日午前、ロシア・ウラジオストク。アジア太平洋経済協力会議（APEC）首脳会議に参加する首脳たちが集まる控室に中国国家主席、胡錦濤が足を踏み入れ首相、野田佳彦の方向へ一直線に歩を進めた。胡に気付いた野田も歩み寄り、対話の必要性を認識していた両者が『あうんの呼吸』（日本側関係者）で立ち話の非公式会談が始まった¹²⁾」というものである。元主席も元首相も会談することを事前に調整していた訳でもなかった。なぜ両者の気持ちが一致したのであろうか。なぜ相互の微妙な調子や気持が一致するのであろうか。

具体例その3。これは熊本県知事選に関するものである。「・・・〔現・熊本県知事〕蒲島〔郁夫〕氏自身が慎重な言い回しを重ねている段階で知事選の話題を持ち出しても混乱を招くだけ・・・『みんな気になっているが、（口に出さないのは）あうんの呼吸だった』。出席者の1人は、その

場の空気をそう解説した¹³⁾」というものである。なぜ気になっていることが、口に出さなくとも分かるのであろうか。

(4)「すべての世界史的な大事件や大人物はいわば二度あらわれる」

これはマルクス (K. Marx, 1818-1883) の言である¹⁴⁾。しかし、この言葉はヘーゲル (G.W.F.Hegel, 1770-1831) が述べたものであるという。二度現れる世界史的な大事件はフランス革命がローマ共和制とローマ帝国の衣装を身にまとい、1848年のフランス二月革命はあるときは1789年のフランス大革命をもじり、あるときは1793年から1795年の革命的伝統をもじって現れた。二度現れる大人物はダントンに代わりコーシディエールが、ロベスピエールに代わりルイ・ブランが、パウロに代わりルターが現れたのである。ちなみに、ヨーロッパのルネサンスは古代ローマへの回帰であったし、日本の明治維新は王政復古であった。なぜ大事件や大人物は二度現れるのであろうか。

(5)「以心伝心で通ずる」

これは岩波書店『広辞苑』(第七版)の「いしんでんしん【以心伝心】」の項目の用例である。意味は「思うことが言葉によらず、互いの心から心に伝わること」である。

人は自分の思うことや考えていることを相手に伝えるために言葉を使う。もちろん、言葉によらずに身振り手振りで自分の意思を相手に伝達することもできる。しかし、この方法は言葉で意思を伝えることができないときとか伝えたくないときに用いられる。意思伝達の通常手段は言葉である。しかし、言葉によらずに自分の意思を相手に知らせることができるのである。それが以心伝心といわれるものである。

具体例。「無線は粗悪で、〔ゼロ戦〕戦闘機に乗り込むと手信号や顔色で連絡を取った。同じ厳しい訓練に耐えてきたから『お互い以心伝心。何を考えているか手に取るように分かった』¹⁵⁾」。なぜ思うことが言葉によらず、互いの心から心に伝わるのであろうか。

(6)「期せずして意見が一致した」

これは岩波書店『広辞苑』(第七版)の「きせずして【期せずして】」の項目の用例である。意味は「(偶然に一致する場合についていう)当初から予想・予定したところではなくして。思いがけなく。偶然」である。

人の思うところや考えは様々である。格言に「意見と餅はつくほど練れる」がある。これは「議論を重ねるほど、良い考えになってゆくものだ」という意味である(『広辞苑』第七版)。この格言には議論を重ねていく過程で意見が集約されて一致するというものである。しかし、ときには相手と議論することなく当初から意見が一致することがある。相手の思うところや考えを聞くことなく意見の一致をみることがある。なぜ意見は期せずして一致するのであろうか。

3. 人間の思考・行動の類似性の根拠

人間の思考・行動の類似性に関する古今東西の格言を取り上げた。なぜこれらの格言が成り立つのか。それらの根拠は何であらうか。

前掲・竹田青嗣『現象学は〈思考の原理〉である』の目的は「フッサール現象学を哲学原理として再生しようとする意図にあり・・・フッサール現象学の意義と可能性をできるだけ理解可能な形で提示すること¹⁶⁾」にある。本書は本稿の課題を検討するとき大いに示唆を与える。それは

人間の「類身体性」の概念である。類身体性とは人間の身体構造は共通性を持っていることをいう。人の身体構造には文化や宗教や風土を超えて大きな共通性がある¹⁷⁾。人の身体構造が共通性を持つから、各人や各共同体に共通して見られる理解＝共通了解が成立するのである¹⁸⁾。

われわれは真夏日や猛暑日になると、あるいはエアコンや扇風機をつけ、あるいはプールに行ったり、避暑地についてあれこれ考える。寒いときは暖かさを求める。これらの行為や考えはわれわれに等しくみられるが、これらは事前に話し合っただけで同じ行動を取ったり考えたりするのではない。同じ行為や考えをするのは、人が暑いとか寒いと感じる身体的な構造を持っているからである。しかし人間は幼い時期に人間社会から引き離されてしまうと、人間の有する感覚機能が低下するようである。

幼児期に森に遺棄された、いわゆる「アヴェロンの野生児」(Le jeune sauvage de l'Aveyron)は初めはほとんど寒暖の感覚を持っていなかった。「冬・・・半裸の彼が何時間も湿った地面にうずくまり、冷たい風雨に身をさらしているのをよく見かけたものだった。皮膚や触覚器官が、寒さだけでなくひどい熱に対してもぜんぜん感受性を示さないでいた。暖炉のそばにいる時、真っ赤に燃えた炭が炉の外へころがり出ると、指でつかみ、あわてるようすもなく炎に包まれた薪の上に置きなおした。これをいつも平気でやってのけた。台所に入り込み、熱い湯の中で煮立っているジャガイモを取り出してしまうことも再三見うけられた¹⁹⁾」。このために、あらゆる方法を用いて熱の刺激を与えたところ、野生児は寒暖に敏感になった²⁰⁾。

アヴェロンの野生児が「示唆している重要なことは、人間的『身体』の感覚の体制は、われわれが一般に考えているほど生得的なものではなく、じつは文化的慣習の中で“構成”されるもの²¹⁾」であるということである。アヴェロンの野生児のように一時的な現象であれ、人の中に暑さや寒さを感じない身体構造を持っている人がいるならば、人間は同じことをしたり考えたりはしないであろう。身体構造が異なると、各人や各共同体に共通してみられる理解＝共通了解は成り立たなくなる。例えば人間の身体構造とダニのそれとは異なるので、両者の間には共通了解は成り立たないのである²²⁾。

4. 人間の思考・行動の類似性に関する仮説の提示—類身体性理論—

一度起こったことはその後何度も起きる。人は同じようなことを行い、同じような考えをする。なぜこのようなことが人間には起きるのであろうか。その根拠として人間の類身体性、すなわち人間の身体構造の共通性を挙げた。この類身体性こそが人間に歴史を繰り返させ、人間の思考・行動に類似性を与えるようになるのではなかろうか。これに由り人間の思考・行動の類似性に関する仮説を提示することができるようになったと思う。それは、「人間の類身体性は人間の思考・行動を同型あるいは類似したものにする」である。

5. おわりに

本稿は人間の思考・行動の類似性に関する仮説として類身体性理論を提示してみた。しかしながら、この理論に対しては異論が唱えられよう。例えば、社会ではしばしば意見の対立がみられるが、これは類身体性理論によっては説明することができないのではないか。したがって類身体性理論は社会現象にではなく自然現象にしか適用することができないのではないか。

本稿はこのような疑問を抱きながらも敢えて類身体性理論を仮説として提示してみた。それは1つには古今東西の格言の根拠を探りたかったこと、いま1つには本稿提示の仮説について批判と教示とを頂きたいからである。批判と教示とを頂ければ幸甚である。

-
- 1) 渡邊榮文「アドミニストレーション過程同型論—なぜアドミニストレーション過程は同じであるのか—」熊本県立大学総合管理学会『アドミニストレーション』第18巻1・2合併号、1-35頁、2011年。なお参照、渡邊榮文「PDCA考」熊本県立大学総合管理学会『アドミニストレーション』第18巻3・4合併号、391-405頁、2012年。アドミニストレーションの分化と収斂については参照、澤田道夫「アドミニストレーションの分化と収斂に関する一試論—メタ概念に基づく生物学的アプローチ—」熊本県立大学総合管理学会『アドミニストレーション』第23巻第2号、78-89頁、2017年。
 - 2) 渡邊榮文「人間の思考・行動の類似性に関する仮説」日本計画行政学会九州支部『JAPA九州』第35号、2頁、2012年。
 - 3) 竹田青嗣『現象学は〈思考の原理〉である』筑摩書房、65頁、2004年。
 - 4) 同上書・65頁。
 - 5) トゥキユディデス著、小西晴雄訳『歴史』(上下)筑摩書房、2013年。
 - 6) 同上書・上・27頁。
 - 7) 同上書・上・277-278頁。
 - 8) 同上書・上・278-280頁。
 - 9) 諸橋轍次『中国古典名言事典』(座右版)講談社、75頁、1993年。
 - 10) 興膳宏『仏教漢語50話』岩波書店、6頁、2011年。
 - 11) 同上書・6頁。
 - 12) 『熊本日日新聞』平成25(2013)年6月22日付。
 - 13) 『熊本日日新聞』平成27(2015)年8月4日付。
 - 14) マルクス著、伊藤真一・北条元一訳『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』岩波書店、17頁、1954年。
 - 15) 『熊本日日新聞』平成28(2016)年8月16日付。
 - 16) 竹田青嗣前掲書・21頁。
 - 17) 同上書・65頁。
 - 18) 同上書・64-65頁。
 - 19) J.M.G.イタル著、中野善達・松田清訳『アヴェロンの野生児』(新訳)福村出版、35頁、1978年。
 - 20) 同上書・37頁。
 - 21) 竹田青嗣前掲書・216頁。
 - 22) 同上書・195-196頁。